

姉妹都市提携盟約 30 周年

81年前の1944年(昭和19年)9月。沖縄県豊見城村から179人、同佐敷村から176人の児童、引率者らが本町に学童疎開。終戦の翌年1946年(昭和21年)までの約2年間をそれぞれの疎開先や学校で過ごしました。それ以来、関係者での交流が続く中、1995年(平成7年)8月1日に豊見城村と佐敷町それぞれと姉妹都市盟約の調印式が行われ、スポーツ少年団やエイサー、職員人事交流など絆を深めてきました。

令和7年11月、姉妹都市盟約30周年記念式典出席のため、町長、町議会議員、町内各種団体、疎開受け入れ先などの関係者ら25人の訪問団が沖縄県を訪れました。訪問先の1つである市役所では、多くの職員らに拍手で出迎えられました。

25日、豊見城市での式典では、琉球舞踊で開幕。徳元次人市長が「30年の間、経済、教育、人事交流などの積み重ねで今がある。これから羽ばたく子どもたちにも事実を継承し、先人が作り上げてきた土台を伝えていくことで、お互いの絆が深まる」とあいさつ。甲斐宗之高千穂町長のあいさつのあと、豊見城市議会の外間剛議長と高千穂町議会の本願と茂議長が祝辞を述べました。

レセプションでは、琉球舞踊や空手の演武、エイサーが披露され、会場にいる全員でカチャーシーを踊り盛会のうちに終了しました。

翌26日、南城市での式典では、「安里屋ユンタ」などの沖縄民謡で開幕。市長職務代理の當眞隆夫南城市副市長が「両市町の多くの魅力を市民に知ってもらいながら、未来永劫のなか、交流を推進し関係を一層深いものにしたい」とあいさつ。甲斐町長のあいさつのあと、沖縄県議会瑞慶覧長風議員が来賓あいさつをしました。

祝賀会では、南城市職員らが「かぎやで風」「四つ竹」の琉球舞踊を披露。青年会によるアヤグやエイサーなどの伝統芸能も披露され、全員でのカチャーシーで盛り上りました。



世界農業遺産(GIAHS) 認定10周年記念シンポジウム



10月31日、ホテル高千穂において「世界農業遺産認定10周年記念シンポジウム」が開催され、町内外から200名を超える参加がありました。

高千穂郷・椎葉山地域は、2015年に国連食糧農業機関(FAO)より世界農業遺産に認定され、今回の記念シンポジウムでは、認定以降10年間の取り組み状況を共有するとともに、保全活動、教育連携、企業との協働など、多岐にわたる成果が紹介されました。

第1部では、世界農業遺産の普及・啓発に長年尽力された個人・団体を表彰する「功労者表彰」が行われ、本町からは田崎耕平さん(中川登・元高千穂土地改良区理事長)が、地域の用水路保全や農地管理に尽力された功績が評価され表彰されました。



第2部の基調講演では、総合地球環境学研究所の阿部健一名誉教授を講師に、「世界が認めた高千穂郷・椎葉山地域の価値～変化の時代に見つめなおす、地域の本質」と題し、有識者の視点から本地域の価値を改めて確認する機会となりました。

続いて行われたパネルディスカッションでは、各地域ごとに選ばれたパネリストが、「山の暮らしから未来を展望する」をテーマに討論。本地域からは、瀬山幸波さん(中川登・花き農家)が登壇し、今後の地域づくりについて意見交換を行いました。



第3部では、次世代の視点を取り入れる取り組みとして、県立高千穂高等学校と県立五ヶ瀬中等教育学校の生徒らによる「GIAHSユース宣言」が行われ、若い世代が地域の価値を学び、守り、未来につないでいく決意を述べました。

本シンポジウムは、行政、地域住民、教育機関、企業など、多様な関係者が一堂に会し、「高千穂郷・椎葉山地域」の未来について考える貴重な機会となりました。

認定から10年を迎えた本年を節目に、次の10年に向けた持続的な取り組みを進めてまいります。